

静岡・御殿・二之宮遺跡

- 1 所在地 静岡県磐田市二之宮
- 2 調査期間 一九九一年(平3)五月～一九九二年五月
- 3 発掘機関 御殿・二之宮遺跡調査会
- 4 調査担当者 折原洋一
- 5 遺跡の種類 旧河川・祭祀跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期～一三世紀、江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(磐田)

御殿・二之宮遺跡は、磐田市街地の南方に接し、磐田原台地の南端部の段丘上からその南方の湿地にかけて立地している。標高は二m前後を測る。この周辺は遠江国磐田郡あるいは豊田郡に属しており、国府推定地の候補地のひとつで、また本遺跡の北方に接して旧東海道が通っている。

御殿・二之宮遺跡の調査は今回で第六次調査となる。第一～第五次までの発掘調

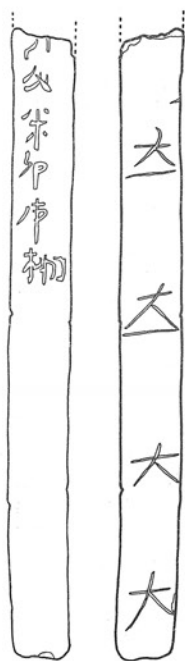
査では、弥生時代後期から平安時代末期までの遺構・遺物が検出されており、中でも奈良・平安時代が主体となっている。第一次調査では木簡が八点出土しており『木簡研究』一・三、また多数の墨書土器が出土していることから国府である可能性が指摘されている。今回の調査区は広範囲にわたる御殿・二之宮遺跡の中でも南西端の湿地部に位置し、遺跡の性格の上でも従来の調査区とは大きく異なる。

調査の結果、弥生時代後期～平安時代にかけての旧河川や水路、堰などが検出された。旧河川より奈良～平安時代の木製祭祀具(人形・馬形・鳥形・舟形・刀形・槍形・絵馬・陽物・斎串)、人面墨書土器が出土し、当時の祭の場であったことが推定される。他に、弥生式土器、古墳時代前期から平安時代にかけての土師器や須恵器、灰釉陶器、平安時代末葉から中世初頭にかけての山茶碗や土師器、弥生時代から平安時代にかけての木製品や金属製品、江戸時代の漆器や曲物、木簡、万年通宝、かわらけなどが出土している。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ・大 一 大 大
 ・□久米郷□□ 「(表裏線刻) (335)×30×4 019
 ・「○中泉久保伝左衛門□右衛門」(門カ)
 ・「○六俵□□入」

250×33×7 011



(1)

(折原洋二)

一年)

磐田市教育委員会『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告』I (一九八

9 関係文献

には中泉代官所が所在した。

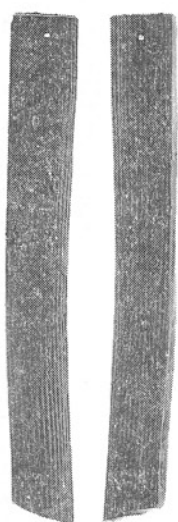
た。本遺跡の北に接する台地は中泉久保と呼ばれ、また北東の台地

跡が当時の磐田郡域にあたるかどうかは不明である。

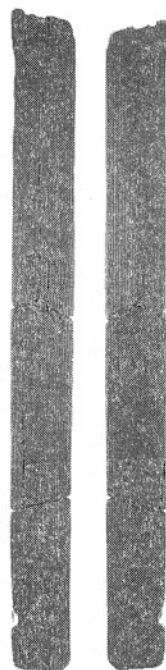
米郷は『和名類聚抄』に遠江国磐田郡の郷名としてみえるが、本遺

面を表としておく。「大」は陰陽道の「太」を示す可能性があ

(1)は一号溝より出土した。文字は両面とも釘状の工具で線刻され



(2)



(1)